
左慈

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

左慈

【Nコード】

N4182A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

三国志に登場する仙人のお話です。曹操や孫策といった御馴染みの人物も登場します。

第一章

左慈

左慈は中国漢代末期にいた人物である。字を元放といい口コウという場所に生まれた。歳をとるにつれ学問と占術を学びその占いで以って漢の命運が衰えてきているのを知った。それを見て彼は考えた。

「これからは学問で身を立てても仕方がないな。折角出世しても争いに巻き込まれてはかなわん」

そう思った彼は学問を止め仙人になろうと決意した。そして山中で修業を積み遂に仙人となることができた。時代は彼が占った通り漢は衰え戦乱の世となっていた。中国は至る所に群雄が割拠し、互いに覇を競うようになった。それは江南においても同じであった。

この時江南を治めていたのは孫策であった。彼は父孫堅が戦死した後袁術の元に身を寄せていたが一念発起し、江南に一大勢力を築いていたのである。若くして勢力を築いた彼を人々はかつて江南を基盤として漢の高祖と天下を争った西楚の霸王項羽に例えて『小霸王』と呼んだ。彼は若くしてひとかどの英雄となっていたのである。彼は才気溢れる人物であった。そして若さ故であろうか好奇心の強い男であった。彼は左慈の名を聞くとその好奇心がもたげてくるのを感じた。そして彼を呼ぶことにしたのだ。

やがて彼の屋敷に一人の老人がやって来た。見れば片目が悪く、片足を引き摺り、藤の冠に青い衣を着ている。孫策は彼を見て問うた。孫策は彼を屋敷の謁見の間で迎えた。家臣を左右に従え椅子に座っていた。見れば英気溢れる端正な顔立ちをしている。体格も立派でまさに小霸王の名に相応しい。左慈とは対象的であった。

「そなたが左慈か」

「はい」

左慈は頭を垂れてそれに答えた。

左慈

「私が左慈でございます」

「そうか」

孫策はその挨拶を受けて頷いた。

「聞くところによるとそなたは仙人だそうだな」

「はい」

彼は答えた。

「仙人は仙術を使い不老不死だと聞く。それに間違いはないな」

「呉侯の仰る通りです」

彼は頷いてそう答えた。孫策はこの時呉侯に任じられていたのである。漢は衰えたりとはいえまだ諸侯にある程度の影響を行使できる存在であったのだ。

「私は主に変化の術を使います」

「ほう」

孫策はそれを聞いて眉をあげた。

「それでは早速それを見せてもらいたいのだが」

「畏まりました」

左慈はそれに応えた。すると両手をかざし何やら唱えはじめた。

そして牛になった。

「牛でございます」

牛が話した。聞いてみればそれは左慈の声であった。

「他にも何かお店見せしましょうか」

「うむ、やってみよ」

孫策は鷹揚に答えた。だが彼はこの時心の中でその態度とは全く別の感情が芽生えてきているのを感じていた。それは彼の様な立場にいる者ならば当然のことであった。

「それでは」

左慈はそれを知ってか知らずかまた何やら唱えた。そして今度は驚となった。

「鳥にも化けられるのか」

「はい。この通り飛ぶこともできます」

彼はそう言うのと飛びはじめた。そして部屋の中を飛び回った。バサバサと翼を動かす音までしていた。

「まだ何かありますか」

「そうだな」

孫策は問われて考え込んだ。

「鳥や獣には化けられるのはわかった」

「はい」

「今度は別のものに化けてくれるか。そうだな」

彼は考えながら言った。

「花に化けられるか。青い花にだ」

「青い花ですか」

「そうだ。できるか」

孫策はニヤリと笑って彼に問うた。青い花は滅多にないものだ。

見たこともない者も多い程であった。

「できなければ私としても考えがある」

彼はここで案に左慈を脅迫にかかった。

「致し方ないことだがな」

「左様ですか」

「うむ。だができるのであれば問題はない」

彼は驚に化けたまま床に降りている左慈にそう言った。

「どうだ。できるか」

「容易いことでございます」

彼はそう言うのとまた何やら唱えて変身した。そして青い花になった。

「おお」

それを見て孫策だけでなく家臣達も思わず声をあげた。彼等の中にも青い花を見たことのない者は多かったのである。そしてその花は一目見たら忘れられない程美しい青であった。空よりも鮮やかな青であった。

左慈

「これで宜しいでしょうか」

「うむ」

孫策は自身の心を隠しながらそれに応えた。表面ではにこやかに笑っていた。

「御苦労、見事であった」

「有り難うございます」

そして左慈は元の姿に戻った。そこにいるのは先程の足の悪い小柄な老人であった。孫策はその老人を見て内心危惧を覚えずにはいられなかった。

彼は左慈に褒美を与え下がらせると家臣のうち最も信頼する張昭と張鈇、そして周瑜の三人を自分の部屋に呼んだ。彼等は孫策の家臣の中でもとりわけ知識、知恵に長けた者達であった。

「さて」

孫策は三人を部屋に呼ぶと彼等に正対した。

「先程のあの左慈という男だが」

「はい」

三人はそれを問われて応えた。

「率直に聞きたい。どう思うか」

「そうですね」

まずは張昭がそれに答えた。

「あやしげな男だと思えます」

「ふむ」

「ただ仙人であるのでここは何もなされぬのが宜しいかと」

「そなたはそう思うか」

「はい」

彼は畏まってそう答えた。

「そうか。確かにそういう方法もあるが」

「私もそう考えますが」

張鈇も張昭と同じ考えであった。

「そなたもか」

「はい。無闇に何かをしては後々祟り等がありませんよう。それを考

えますと」

「何もするべきではないというのだな」

「はい」

「うづむ」

だが孫策はそれには賛成していないようであった。彼は元々仙人といった存在を好まなかったのだ。彼にとってそうした存在は世を惑わすものでしかなかった。後に彼は干吉という仙人を殺しその崇りによって死んでいる。そうした考えはこの時から変わりはないたのである。

「だがな。ああした者を呉に置いておくのは」

「ですが下手に手を下されても殿の権威を失墜させるかと」

「仙人という存在はやはり民にとって尊敬の対象ですし」

「そうだな。さて、どうするか」

「それならば密かに殺してはどうでしょうか」

ここで高く美しい声がした。孫策達がそちらに顔を向けるとそこには女性と見紛うばかりの美しい顔立ちの青年が立っていた。服もみらびやかなものでその容姿に合っていた。彼が周瑜であった。

「周瑜殿」

張昭と張鈇は彼の名を呼んだ。周瑜はそれを受けて少し頭を下げた。

「確かに下手に殺しては民への影響が心配されます」

「そう、それが問題ですぞ」

「祟りもありますが」

「祟りはこの際無視しても宜しいでしょう。要は殿が気をしっかりと持たなければよいことです」

「わしがか」

「はい。幸い今殿は心も体も充実しておられます。例え祟りがあるうとも今の殿なら大丈夫です」

「ふむ」

これは当たっていた。孫策が後に干吉の祟りで死んだのは暗殺を

受けその際傷を負っていたからだ。それが回復していない時に受けたからであった。身体が弱っていたのである。

「それでは殺しても問題はないな」

「私はそう思います」

「だが問題は方法か。さて」

孫策は考え込んだ。そこで張昭が言った。

「それなら左慈を誘い出してはどうでしょうか」

「誘い出すのか」

「はい。殿が外出されて。そしてその時に」

張昭もここまで来れば止めるつもりはなかった。やるからには成功させなければならぬ。そう思い主にそう提案したのであった。

「成程な。問題は場所か」

「それなら私がいい場所を知っております」

張鉞がここで言った。彼も張昭と同じ考えであった。

「おおつらえ向きの庭があります。ここの外れの」

「おお、あそこか」

孫策はそれを聞いて笑顔で頷いた。

「確かにあそこならいいな。人もおらぬ」

「それに死体は江に放り込むことができますし。どうでしょうか」

「よし、ではそれでいこう」

彼は決意した。そしてあらためて三人に対して言った。

「明日だ。それでよいな」

「はっ」

三人はそれを受けて頭を垂れた。こうして孫策は左慈を殺すことにした。翌日の昼彼は左慈をその庭に案内した。孫策も一緒であった。

「ほう、これは」

左慈は一本の樁の木を見て目を細めた。

「素晴らしい樁ですな」

「ははは、そうですね」

孫策は表面上はにこやかに笑ってそれに応えた。だが心の中では違っていた。

（さて、どうするか）

彼をどう殺すかだけを考えていた。後ろには馬を繋いでいる。ちらりとそちらを見た。

（使えるな）

馬を使うことにした。それならば例え逃げても追いつくことができる。だがそれは必要ないかと思った。左慈は足が悪いのである。だが彼はここで思い直した。

（用心には用心を重ねるか）

そういうことであつた。彼はことには万全を期すつもりであつたのだ。見れば左慈はまだ椿を見ていた。雪の様に白い椿であつた。

「綺麗なものですな」

「この庭で最もよい椿です」

孫策はそう受け答えた。ここで左慈はぼつりと言つた。

「私は白い椿が好きでして」

「ほつ」

「赤いのはどうも。血を思い出しますからね」

「血、ですか」

「はい」

左慈は何も気付かないような顔でそれに答えた。

「孫策様もそうではありませんか」

「いえ、別に」

そう断る。その時心の中である疑念が浮かんでいた。まさか気付いているのでは。だがそれでも今更止めるつもりもなかった。彼はあらためて左慈に対して言つた。

「あちらはどうですか」

「あちらですか」

「はい。江でも見て。ここから見える江は見事なものですぞ」

「それでは御言葉に甘えまして」

彼はそれを受けて椿から離れて江に向かった。孫策はそれを好機と見た。

(よし)

彼は馬に飛び乗った。そして腰の剣を抜く。それで彼を一思いに切るだけであった。見れば左慈は杖をついてゆっくりと歩いていた。間違いなく殺せると思った。

「行け」

孫策は馬を走らせた。そして左慈を追った。だがここで異変が起こった。

「むっ!？」

何と左慈に追いつくことができないのである。彼は馬に乗り左慈は歩いているというのに。彼は最初それがわからなかった。

「これはどういうことだ!？」

不思議に思った彼は馬に鞭を入れた。馬はそれを受け脚を速めた。だがそれでも左慈に追いつくことはできない。

「孫策様」

ここで左慈は振り向いて彼に声をかけた。

「どうなされたのですか」

「いや」

孫策は彼の顔を見て慌てた。気付かれている、と確信した。

「今そちらにお伺いしようとしているのですが」

「左様ですか」

左慈はにこやかに笑ってそれに応えた。

「それではおいで下さいませ」

「は、はい」

だが左慈のもとに辿り着くことはできなかった。彼はさらに馬を走らせてそこに向かう。だがそれでも行くことはできなかった。流石にこれには参った。

「左慈殿」

「はい」

左慈はやはりにこやかに笑って彼に応えた。

「そちらに行っても宜しいでしょうか」

「どうぞ」

彼がそう言うと馬は一瞬にしてその側にまで来た。馬も孫策ももう肩で息をしていた。

「御苦労様です」

やはり左慈は笑っていた。孫策にはその笑みが何によるものかわかっていた。そして彼は諦めた。それから彼を普通にもてなした。そして彼を快く送り出した。だがその顔は始終不機嫌なままであった。

「やはり仙人は好きにはなれない」

それが彼の率直な感想であった。そしてそれは終生変わらなかった。それが為に命を落としてしまうことは知らなかった。

第二章

左慈は東呉に向かった。そこに知り合いの仙人である徐墮という者がいるのだ。彼は左慈と共に修業した仲間であった。仙人になるのも一緒であったのだ。

「さて、どうしているかの」

彼は友に会うのを楽しみにしていた。彼の家に行くとき先客がいた。門の前には牛車が七台程止まっていた。

「客人がいたか」

ここでその客人が家の門から出て来た。見れば意地悪そうな顔をしている。実際に彼は意地悪だった。左慈に対してこう言った。

「徐さんはおられませんよ」

「そうなのですか」

「はい」

だが左慈は真相に気付いていた。彼の意地の悪い笑みでそれがわかったのだ。

「私も今尋ねたのですが。残念なことです」

「左様ですか。それでは」

「はい」

彼は立ち去った。客はそれを見て笑った。

「帰ったな。よしよし」

単なる意地悪であったがそれでよかった。彼は他人に意地悪をするのが趣味であるかあらだ。思えば趣味の悪い男ではある。

「それでは戻るか」

そして彼は徐の屋敷の中に戻ろうとした。だがここで彼はふと屋敷の前に止めている牛車に目をやった。何とその中の一頭が車から離れ歩きはじめたのである。

「ん!？」

見れば牛はすぐ側に生えている柳の梢の上に来た。そしてそこを

歩いているのである。これはまた妙な光景であった。

「これは一体どうしたことじゃ」

彼はそれを受けて樹の上に登った。そして見てみた。すると牛はそこにはいなかった。何処にも見えなかった。

「うづむ」

不思議に思い下りるとまたもや樹の上を歩いている。男はそれを見てさらにわからなくなった。何度繰り返しても同じであった。考えてもわからないので屋敷の門のところに戻った。するとそこでも異変があった。

今度は車であった。何と車輪に全て棘が生えているのである。それもかなりの長さであった。

切ろうにもあまりにも固くて鋸を通さない。そして動きもしない。これには流石に困り果てた。

「牛だけではなく車もか。これは一体どうしたことが」

ここで屋敷から徐が出て来た。白く長い髭の温和そうな顔立ちの男であった。

「あ、これは徐さん」

「見たところ何かあったようですが」

「はい、実は」

彼は話をはじめた。徐は全てを聞き終わると何かわかったように頷いた。

「成程、あの方が来られたのですな」

「あの方とは」

「左慈という方ですよ。この様なことができるのはあの方以外におりませぬから」

「左慈」

「はい。知り合いの仙人の方です。色々と術を知っておいでなのです」

「そうだったのですか。それを知っていれば」

客はそれを受けて苦い顔をした。だが後悔しても何にもならなかった。所謂自業自得というものである。だがここで徐は彼に助け舟を出した。

「何とかしたいですか」

「それはもう。このままでは家に帰ることもできませんから」

「わかりました」

彼はそれを受けて頷いた。

「それではあの方が行かれた方へ進まれならい。そうすれば御会いできます。そしてそこで謝罪されればいいでしょう」

「許して下さいでしょうか」

「ええ」

彼は笑顔でそれに頷いた。

「あの方は優しい方ですから。謝れば許して下さいますよ」

「それはよかったです」

「ささ、早いうちに。善は急げといえますからな」

「はい」

それを受けて彼は左慈の行った方を進んだ。そして暫くして彼に会った。

「おや」

左慈は彼を認めて振り向いた。にこにこ笑っている。

「どうされたのですか」

「あの、先程は」

彼は徐に言われた通りに頭を下げた。そして謝罪した。

「先程は失礼致しました」

「いえいえ、わかって下さればそれでよいです」

左慈は微笑んでそれに応えた。それから杖を一振りした。そしてまた彼に対して言った。

「戻ってみなされ。万事元通りになっておりますぞ」

「はい」

彼は言われるがままに戻ると牛も車も元通りになっていた。それ

を見てほつと胸を撫で下ろした。

「よかった」

それからその男は心を入れ替えに二度と他人に対して意地悪なぞしなくなつたという。左慈の件で流石に反省したからであつた。左慈はこの後徐に会い歓待を受けた。そして今度は荊州に向かつてであつた。

荊州を治めていたのは劉表であつた。彼は皇族であり人格も温和だということだ。信望が高かつた。だが今一つ気が弱く優柔不断であつた。だがこの時の彼は違つていた。

「それは本当か」

「はい、間違いないかと」

彼は腹心の部下である蔡瑁に尋ねた。彼は劉表の妻の兄なのである。

「そうですね」

問われた蔡瑁は暫し考え込んだ。それから話をはじめた。

「まずあの左慈という者ですが怪しげな男であります」

「ふむ」

劉表はそれを受けて頷いた。

「先に呉の孫策のところに行ったというのは御聞きでしょうか」

「それは聞いている」

彼もそのことは知つていた。

「何でも怪しげな術を使つて孫策の策から逃れたそうだな」

「はい、聞くところによると孫策が馬で追いましたが追いつけなかつたとのこと。やはり只者ではありませぬ」

「その様な男をこの荊州に入れてよいかな」

「私はそれには反対です」

彼はきつぱりとそう答えた。この蔡瑁という男は将としては中々の才覚がありとりわけ水軍の指揮に秀でていた。それ故左慈の様な怪しげな男が国に入るといふことに対して危険なものを感じていたのである。彼は将として国の安全を預かる立場からそう答えたので

ある。

「あの様な者を国に入れるのはどうかと思いますが」

「そなたはそう思うか」

「はい」

「だがな」

ここで劉表は顔を曇らせて言った。

「あの左慈という男は妖術を使う。あの孫策ですらそれを破れなかつたのじゃ」

「はい」

「それはどうするのじゃ。奴を何とかするのは容易ではないぞ」

「殿」

蔡瑁はここで言った。

「孫策は一人で奴を殺そうとしましたな」

「うむ」

その通りであった。劉表はそれに頷いた。

「それが間違いだったのです。如何にあの男が武芸に秀でていても一人で仙人を倒すのは無理というものです」

「そうなのか」

「はい。ですから私に考えがあります。千の兵を用意できますか」

「何時でも出来るぞ」

「それならば問題ありません。それを私に預けて下さいませ」

「その兵で何をするつもりか」

「殿、孫策は一人であったが故に失敗しましたな」

「うむ」

「それでは千人ではどうですか。如何に左慈と申す者が妖しげな術を使いましても」

そう言つてニヤリと笑つた。彼もまた左慈を殺すつもりだったのだ。

左慈

「やるのか」

「はい」

蔡瑁はまた頷いた。

「ここはお任せ下さい。宜しいでしょうか」

「うむ……いや、待て」

だがここで劉表は彼を止めた。

「どう為されたのですか」

「私も行こう。あの男がもし本当に仙人ならば色々と見てみたい」

「左様ですか」

「そうじゃ。どのみち今は特に大事もないしな。それで行くか」

「はい」

こうして劉表は蔡瑁と千の兵と共に国境に向かった。左慈は荊州の入口で彼等を確認した。

「おお、これはこれは」

彼はその千の兵を見ても怖れてはいなかった。ゆっくりと前に進んで来た。

「これはどうも。私を出迎えて下さるのですな」

「如何にも」

鎧を着た劉表はそれに応えた。その後ろには武装した千の兵が控えていた。

「左慈殿ですな」

「はい」

「貴公に用がありここでお待ちしとりました。実は御聞きしたいことがありまして」

「何ですか」

左慈はにこやかに笑ってそれに答えた。

「貴公は仙人でしたな」

「如何にも」

笑ってその問いに頷いた。了承の証であった。

「僭越ながら術をほんの少し使うことができます」

「左様ですか。それではお願いがあるのですが」

「何ですか。術を御覧になりたいのですかな」

「はい」

劉表はそれに頷いた。

「宜しければ拝見させて頂きたいのですが」

「わかり申した」

左慈はそれにまた頷いた。だが蔡瑁はそれを見て怪訝な顔をした。

「殿」

「まあ待て」

しかし劉表はここで彼を宥めた。

「まずは見てからでよいではないか。一度見て本物が害がないか見極めたい」

「そうですね」

蔡瑁はそれには同意した。劉表は取り立てて有能な男ではないがかといって無能でもない。また血を見るのをあまり好まないのだ。それがわかっているから彼もそれに同意したのだ。

「さて」

劉表はあらためて左慈に対して顔を向けた。

「それでは術を拝見させてもらいましょうか」

「わかりました」

左慈はにこりと笑って頷いた。そして劉表に問うた。

「どのような術が宜しいですか」

「そうですね」

彼は問われて考え込んだ。

「丁度お昼時ですし」

「はい」

「食事を頂きたいですな。ただし」

ここで劉表は彼を試すことにした。

「ここにいる全ての者の食事をです」

「ふむ。一千はおられるようですね」

「はい。できますかな。貴方が術を使われるのならば容易いことだと思えますが」

「畏まりました」

左慈はそう答えると杖を上に掲げて振りかざした。そしてそこから一斗の樽と一束の干し肉を出した。干し肉は皿の上に置かれていた。

「これで如何でしょうか」

「それだけです」

「これで充分ですが。何でしたら貴方からお取りになって下さい」

「わかりました」

劉表はそれを受けて前に出ようとした。だがそれを蔡瑁が止めた。

「我が君、お待ち下さい」

「どうしたのじゃ」

「危ないかも知れませぬ。ここはまず私が」

彼はここで毒見役を買って出た。そして最初に肉と酒を取った。

それを口に含んだ。

「どうじゃ」

「はい」

彼は肉と酒を一口ずつ飲み込んでから答えた。

「美味しいです。問題はないかと」

「そうか。ならば」

それを受けて劉表も肉と酒を手にした。そしてそれを口にした。

食べてみると蔡瑁の言う通り美味かった。そして見れば肉も酒も全

く減ってはいなかった。

「減ってはおらん」

「はい」

左慈はそれに答えた。

「千人分どころか幾らでもありますぞ、ささ」

彼はここで兵士達にも肉と酒を勧めた。

「どんどん召し上がられよ。幾らでもありますからな」

「はい」

「喜んで」

兵士達も喜んで肉と酒を受け取った。一千人の兵士達が肉と酒を受け取つてもやはり全く減つてはいなかった。彼等はお替りをしたがそれでも減らない。そして彼等は肉と酒を心ゆくまで堪能した。劉表はそれを見て考えを決めた。彼は左慈に対して言った。

「左慈殿」

「はい」

「これからどうなさるおつもりですか」

「これからですか」

彼はにこやかに笑つてそれに応えた。

「はい。荊州に入られますか」

「そうですね」

問われた彼は考え込んだ。

「それではご好意に甘えまして」

「そうぞ」

こうして彼は安全に荊州に入ることができた。そこに暫く滞在すると彼は今度は北に向かうこととなった。そこには漢の都許昌があり、この国で第一の実力者曹操がいた。彼は皇帝を立てて自らは天下を掌中に収めんとしていたのだ。人は彼を乱世の姦雄と呼んでいた。政治にも軍事にも長けた天才的な人物であった。左慈は今彼の勢力圏に入ったのであった。彼はこの時魏公となっていた。

左慈が魏に入ったという話はすぐに曹操の耳にも入った。彼はすぐに都に彼を呼び出した。

左慈はそれを受けて都に入った。そして曹操の前に出た。そこには豪華な赤い服に身を包んだ鋭利な顔立ちの男がいた。彼こそが曹操である。

第三章

「そなたが左慈か」

曹操はややかん高い声で左慈に対して問うた。鋭い目の光が彼を見据えている。

「はい」

左慈はその光にも怖れることなく応えた。そして言った。

「私が左慈でございます」

「そうか」

曹操はそれを受けて頷いた。そして彼に対してまた問うた。

「そなたは術を使えるそうだな」

「はい」

彼はそれに頷いて答えた。

「その通りでございます」

「わかった。それでは早速それを見せてもらおう」

「何をしましょうか」

「いや、何もなくてよい」

だが曹操はここでそう言った。

「何もしなくていいとは」

「すぐにわかる。これ」

彼は左右の衛兵に対して声をかけた。

「この者を石室に入れよ。よいな」

「わかりました」

衛兵達はそれを受けて左慈を捕らえた。曹操はそれを確かめてからまた左慈に対して言った。

「これから一年の間そなたを石室に案内する」

「一年ですか」

「そうだ。その間水も食い物もやらぬ。そなたは仙人なのだろう」

「はい」

左慈

「ならば何も食べなくとも飲まずともよい筈だ。そうだな」

彼はニヤリと笑ってそう尋ねた。左慈はそれに対して全く顔を変
えることなくそれに答えた。

「その通りでございます」

「ならばよい」

曹操はそれを聞いて頷いた。そして左慈をその言葉通り石室に入
れた。そして一年もの間水も食べ物も何もやらす閉じ込めた。だが
左慈は弱ることもなく平然としていた。一年が経ち彼が平然と生き
ていることを知った曹操はかえってそれを無気味に思った。

「これは一体どういうことだ」

彼は首を傾げて考え込んだ。鋭利なその整った顔立ちを疑念の色
が覆う。

彼はここである決意をした。彼は左慈に対してえも言われぬ無気
味さを感じていたのだ。そして躊躇わなかった。彼は実に決断の早
い男であったのだ。

「殺す、か」

そう決めると後は人をやるだけである。彼はここで人を呼んだ。
すぐに誰かがやって来た。

「御呼びでしょうか」

「うむ。……む!?」

曹操は部屋に入って来た者を見て思わず声をあげた。何とそこに
いたのは左慈であったのだ。

「貴様、どうしてここに!？」

「ははは、私は仙人ですから」

彼は笑ってそれに答えた。

「石位何ともなく通り抜けられるのです」

「貴様、あやかしであったか」

「まさか。仙人だと今申し上げたでしょう」

「むう。まあよい。それでだ」

「はい」

「何故ここに来たのだ。申してみよ」

「お暇を申し出に来ました」

「暇を!？」

「はい。明公が私を殺そうと考えておられるからです。申し訳ありませんがこれでお暇させて頂きます」

「何を馬鹿なことを言っておる」

曹操はあえて笑顔を作ってそう言った。

「何故私がそなたを殺さなくてはならんのだ」

「私に怖れを抱いておられるからです」

「また馬鹿なことを」

曹操はそれを聞いて笑ってみせた。

「何故幾多の戦場を駆け巡ってきた私がそなたの様な老人を怖れなくてはならぬのだ。冗談にしては度が過ぎるぞ」

「それではお暇して宜しいですな」

「うむ」

こうなつては引くことは出来なかつた。彼は渋々ながらそれを認めめた。

「それでは行くがいい」

「わかりました」

こうして左慈は曹操の元を去ることになった。曹操はここで度量に広いところを見せ彼の為に宴会を設けることにした。宴は豪華なものであつた。曹操はここで文武の百官を集め宴を催した。並ぶ酒も料理も豪華なものであつた。

「どうか、この宴は」

曹操は得意な顔で左慈を見た。

「豪華なものであろう」

「そうですな」

左慈はいつものあのにこやかな笑みでそれに応えた。

「この魚も美味しいですし」

彼はここで鯉を口にしていた。曹操はそれを見てふと気付いた。

「そういえば松江のスズキがないのう」

「そういえばそうですな」

他の者もそれを言われて気付いた。

「ただあれは季節ではないです。それ程御気にかけることもないかと」

「そうだな」

曹操は腹心の部下である夏侯惇の言葉を聞いて頷いた。曹操は元々夏侯氏の血を引いている。彼の家は漢王朝の功臣の一人である曹参の家であるが祖父が宦官であり父は夏侯氏から養子に入ったのである。その為彼は曹、夏侯二つの家とつながりがあるのである。なお夏侯氏もまた漢王朝の功臣の家である。この夏侯惇は曹操の腹心中の腹心であり曹操の家臣の中ではかなり高位に位置していた。隻眼の名将である。

「それではそれは置いておくか」

「はい」

「お待ち下さい」

だがここで左慈が出て来た。曹操はそれを見て内心嫌な顔をした。だがそれを表に出すわけにはいかなかった。今は宴の場なのである。

「何だ」

彼は表向きは表情を変えず彼に尋ねた。

「明公は松江のスズキをご所望ですな」

「いや、別に」

彼はそう言つて断つた。

「季節ではないしな。それにこの許都では手には入らぬ」

「季節であつて手に入ればいいのですな」

「まあな」

彼はここでいぶかしがりながらもそれを認めた。

「手に入れば、だぞ」

「わかりました」

彼はそれを聞いて頷いた。そして懐から銅盤を取り出した。

「何処からあんなものを」

「よく出してきたな」

宴にいた者はそれを見て首を傾げた。だが曹操はそれでも表情を変えず左慈を見ていた。

「それをどうするのだ」

「まあ御覧下さい」

今度は釣り糸を出してきた。そしてそれを銅盤に垂らした。するとそこから見事なスズキが釣られた。

「これでどうですか」

左慈はその釣ったスズキを曹操に見せて問うた。得意な顔であった。

「ふむ」

曹操はそれを見て頷いた。表向きはやはり何事もなかったように取り澄ましていたが内心は左慈に対する殺意がより高まっていた。

「もう一つ思い出した」

「何でしょうか」

「益州の生姜じゃ。これはあるかな」

「生姜ですか」

「そうじゃ。わしはあれが好きでの中」

曹操はニヤリと笑いながら言った。

「じゃが手には入りはせぬだろうな。今あの地は賊の手に落ちておるからな」

「はい」

夏侯惇はそれを聞いて頷いた。今益州は曹操の宿敵の一人劉備の勢力圏となっていたのである。彼は皇族ではあるが曹操と敵対していたのだ。

「流石にこれは無理じゃろう」

「お安い御用です」

左慈はそれを聞いてしれっとした様子でそう言った。

「まさか」

「幾ら何でもそれは」
「いやいや」

周りの者の言葉にも左慈は動じていなかった。彼はここでまた懐に手を入れた。そして生姜を出したのであった。

「これで宜しいでしょうか」
「うむ」

曹操は憮然とした顔で頷いた。

「御苦労。それでは早速そのスズキと生姜を料理するでしょう。左慈よ、感謝する」

「有り難うございます」

左慈はそう答えて頭を垂れた。スズキと生姜は奥に運ばれていく。そして曹操は彼に対してまた声をかけた。

「ところでだ」

「はい」

「このスズキと生姜の礼をしたい」

「何でしょうか」

「褒美をとらす。何でも好きなものを申してみよ」

「褒美ですか」

「うむ」

曹操は頷いた。

「それでは酒を一杯頂きたいのですが」

「酒をか」

「はい」

左慈は微笑んでそれに答えた。

「そんなものでよいのか」

「はい」

「言っておくがもつといい褒美が他に幾らでもあるのだぞ」

「私は元々欲のない男でして」

彼はそう答えた。

「それで充分でございます」

「そうか」

曹操はそれを聞いて頷いた。

「それでは酒とらそう。熱いのでよいか」

「はい」

「それでは」

曹操は酒に爛をするように命じた。程なくして酒が運ばれてきた。

「さあ、飲むがよい」

「有り難うございます。それでは」

彼はここで冠の簪を抜き取った。そしてそれを杯の中に入れた。

「ん!？」

皆それを見て不思議に思った。

「何をしておるのか」

曹操もそれは同じであった。彼は眉を顰めさせて左慈に問うた。

「少し趣向を」

彼は笑ってその言葉を返す。見れば簪はまるで墨を磨る様に消えていく。そして遂には消えてなくなってしまった。

「これでよし」

彼はそう言うと杯から手を引いた。するとそこにはあの簪があった。

「何と」

「これはまた」

皆それを見て驚いた。だがそれで終わりではなかった。

左慈は今度はその簪で杯の中の酒を切った。すると杯の中の酒が二つに分かれたのであった。

「酒が二つに」

「一体どういうことだ」

それを見てさらに驚かされた。左慈は悠々と笑ったまま動きを続ける。まずは曹操に申し出た。

「この杯で飲みませんか」

「その酒をか」

「はい。これから長い間御会いすることはないでしょうから。折角の別れの杯に」
「わかった」

彼は頷いた。この時彼はまず自分が先に飲むものだと思っていた。だがそれは外れた。まずは左慈が飲んだ。それから彼はその杯を曹操に手渡した。見ればその中の酒は二つに分かれていた。

「さあ、どうぞ」
「うむ」

頷いてみたもののどうも飲む気にはなれなかった。無気味な感じがしてならなかつたからだ。

暫く持ったままにしていると左慈が声をかけてきた。

「明公」

「何じゃ」

「また面白い余興をお見せ致しましょうか」

「余興を」

「はい。それではその杯を」

「うむ」

曹操はそれに従い杯を左慈に戻した。すると彼はそれを受け取るや否やすぐに楯に投げ付けた。

「!?!」

今度は何をするのか、と誰もが思った。すると杯は宙に浮かんでいた。ゆらゆらと揺れながら浮かんでいる。

「杯が宙に」

「これも術なのか」

「如何にも」

左慈は答えた。見れば杯はそのまま宙に浮かんだままであった。

「さて、この杯を御覧下さいませ」

「むむむ」

曹操だけでなくその場にいた全ての者が見ていた。杯はそのまま宙をゆっくりと飛びはじめた。それはまるで雲の様であった。

「これからどうなるのだ」

「飛んだままか!？」

皆考えはじめた。何時しか左慈のことは完全に忘れてしまっていた。

やがて杯はことりと床に落ちた。そしてその頃には左慈は何処かへと消えてしまっていた。捜してみたがやはり何処にもいなかった。曹操はそれを聞いてさらに左慈を殺そうと決意した。

「こうなつては許してはおけぬ」

曹操は家臣達を集め怒りに満ちた顔と声でそう言った。赤い服がまるで炎の様に見えた。

「お待ち下さい」

だがそんな彼を制止する者がいた。彼の参謀の一人である程?であつた。

「程?か。どうしたのじゃ」

「あの左慈という者ですがさしあたっては放つておいてもいいと思つたのですが」

「何故じゃ」

「確かに明公のお怒りはわかります」

「当然じゃ。何を令更」

誇りを傷つけられて黙つていているような曹操ではない。彼の怒りは止まるところを知らないものであつた。彼は激情家でもあるのだ。

彼は政治家、軍人であると共に優れた詩人でもあつた。詩は豊かな感情なくしては書くことは出来ない。今はそれが裏目に出てしまつていた。

「ですがあの者は明公に何か害を為したわけではありませぬ」

「私を侮辱してもか」

「はい。ここはどうか堪えて頂きたいのです」

「ふむ」

感情的ではあるが家臣の言葉を聞き入れないというわけではなかつた。曹操は柔軟な考えも出来る人物であつた。だからこそ天下の

大半を手中に収めることができたのである。

「放っておきましょう。どうせあの男は悪戯をするだけですから」
「そうだな」

曹操はそれに頷いた。それでこの話を終わらせるつもりであった。ところがそうはいかなかったのだ。何とこの場にあの男が姿を現わしたのだ。

「そういうわけではありませんぞ」
「貴様か」

曹操は部屋に突如として入って来た左慈を睨みつけて言った。怒りを忘れようとしていたその顔に再び怒りの色が満ちてきた。

「一体何をしに来たのだ」
「明公にお話したいことがあります」
「話とな」

「はい」
左慈はいつもの微笑みを浮かべてそれに頷いた。

「明公は仙人になれる素養がおります」
「ほう」

曹操はそれを聞いて怒りに満ちた顔を微かにほころばせた。

「そうなのか」

「はい。その御顔を見ますと。それで今日は提案したことがあります
してこちらに参りました」

「提案とな」

「そうです。宜しいでしょうか」

「うむ」

曹操はそれを認めた。

「何でもよい。申してみよ」

「わかりました。それでは私と一緒に山へ登りましょう」

「山に!？」

「はい」

左慈は答えた。

「山にです。そして仙人になりましたよぞ」

「その気持ちは有り難いがな」

曹操は苦笑いをしてそれに応えた。

「生憎私にはまだその考えはない。悪いがな」

「左様ですか」

「うむ。気持ちだけ取っておこう」

「残念なことです。それでは私は無理にでも明公に山に来て頂かなくてはなりません」

「どういふことじゃ」

「はい。これで以つてです」

彼はここで懐から剣を取り出した。皆それを見て身構える。曹操の顔を夏侯惇と曹操の従兄弟である曹洪が護る。二人共曹操の腹心中の腹心であり曹操軍に重鎮でもある。言うならば曹操の懐刀だ。

「益州の劉皇叔に天下を譲られてはどうですかな」

「馬鹿なことを」

曹操はまた怒りを爆発させた。彼は柄に手をあてて席から立った。

「何故私があのような男に天下を譲らなければならぬのだ」

「それが天の理であるからでございます」

左慈はそれつとしてそう答えた。

「明公が仙人になられて劉備様が天下を治められるのは。そうは思いませんか」

「思わぬ」

曹操は即答した。

「悪ふざけも大概にするがよい」

「おやおや」

「夏侯惇、曹洪」

曹操は脇を固める二人に声をかけた。

「この者を切り捨てよ、よいな」

「はっ」

「畏まりました」

二人はそれを受けて切り掛かる。だが左慈はそれより前に部屋から姿を消した。まるで煙の様に姿を消してしまったのである。

「ぬうつ、またしても消えたか」

曹操はそれを見てさらに怒りを爆発させた。

「今度ばかりは許してはおけぬ。追ってすぐに殺してしまえ、よいな」

夏侯惇と曹洪にそう命じる。二人はそれを受けてすぐに動いた。

彼等は兵を連れて左慈の搜索を開始した。やがて許都のすぐ外の草原で彼が見つかった。

「いたぞ、あそこだ」

兵士の一人がそう叫ぶ。それを受けて曹洪が馬に乗り兵士達を連れてそこに急行した。するとそこにあの男がいた。曹洪は彼を見て叫んだ。

「殺せ！」

「ハッ！」

それを受けて兵士達が動く。曹洪も剣を手に向かう。だがここで左慈は羊の群れの中に入り込んだ。

「ムッ!？」

見ればそこで左慈は消えた。曹洪はそれを見て左慈が羊に化けたものだと考えた。そこでその羊達の主である若い羊飼いに對して言った。

「済まないが羊の数を数えてくれないか」

「わかりました」

その羊飼いは頷いてそれに応えた。そして数えてみると彼は不思議そうな顔をした。

「おかしですね」

「どうしたのだ」

「いえね、羊が一頭多いのですよ。おかしいなあ」

「そうか、多いのか」

「はい。何故なんでしょう」

「理由はわかっている」

曹洪は彼に対してそう答えた。

「わかっておられるのですか？」

「うむ。こちらの事情でな。さて」

彼はここで羊達を見据えた。

「巧く化けたつもりだろうがそうはいかぬ。さあ覚悟しろ」

「ほっほっほ」

だがここで笑い声がした。見れば羊の中から聞こえてきた。

「覚悟しろとは私に対してですか」

そしてその中から一頭の羊が出て来た。異様に大きく白い羊であった。

「羊がしゃべった」

羊飼いはそれを見て驚きの声をあげた。曹洪はそんな彼に対して言った。

「案ずるな、あれは妖術使いだ」

「妖術使い」

「そうだ。だから下がっておれ。よいな」

「わかりました」

羊飼いはそれを受けて下がった。曹洪はそれを確かめるとあらためて左慈が化けたと思われる羊を見据えた。

「覚悟はよいな」

「ほっほっほ」

「何がおかしい」

「まさか私が左慈だと思われているのですかな」

「何!？」

「私は左慈ではありませんぞ」

「馬鹿を申せ」

「いえ、それが証拠に」

ここで別の羊が声をあげた。

「私が左慈なのですから」

「何!？」

それを聞いてさしもの曹洪も思わず声をあげた。

「私もです」

別の羊もそう言った。それを見た兵士の一人が羊飼いに對してこ
う問うた。

「御前の羊は人の言葉を話せるのか!？」

「まさか」

羊飼いはその問いに首を横に振って応えた。

「そんな筈がありません」

「そうであるうな」

兵士も馬鹿な質問をしたと思った。曹洪はそれを見てまた言った。

「それではだ」

彼は今度は羊飼いに對して言う。

「はい」

「一体どれが御前の羊なのだ?生憎わしにはわからん」

「それでしたら」

彼はここで頷いた。そして笛を吹いた。すると羊達が動いた。

「これで動いた羊がそうでございます」

「そうか。ならば」

だがどの羊も動く。これを見てさらにおかしく思った曹洪はまた
数を数えさせた。すると元に戻っていた。

「逃げられたというのか」

「どうやらそのようですな」

兵士がそれを見て顔を顰めて応えた。

「また何かに化けて去ったのでしょうか」

「何という奴だ。だが遠くへは行ってはおるまい」

「はい」

「搜索を続けるぞ。よいな」

「はっ」

それを受けて兵士達は馬に乗った。曹洪もそれに続く。そして羊

飼いに対して顔を向けた。

「手間をとらせたな」

「いえいえ」

「このことは明公にお伝えしておく。手間をとらせたぶんは払っておく」

「といたしますと」

「何、すぐにわかることだ」

曹洪はそう言うとその場を後にした。後程この羊飼いには一袋の金が贈られたという。曹操は決して吝嗇でも民を忘れてたりもしなかったのである。

第四章

搜索が続けられ遂に左慈が捕らえられた。曹操はそれを聞くとすぐに彼を牢に入れるように命じた。

「これでようやく終わるな」

曹操はそれを聞いて胸を撫で下ろした。そして周りの者に彼を拷問するように言った。今までが今までであるから念を入れて始末するつもりであったのだ。

早速彼に拷問が加えられた。だが彼は何をされても平気な顔をしていた。それを聞いて曹操は考え込んだ。ここで程？がまた出て来た。

「私に考えがあるのですが」

「何だ」

曹操は彼の言葉に耳を傾けさせた。

「この前は一年の間何も与えずとも生きておりましたな」

「うむ」

「それでは今度は逆の方法で責めてはどうでしょうか」

「逆の方法とは」

「はい。今度は食べさせて殺すのです。肉と酒を奴の腹に思いきり詰め込んでやりましょう。これならばあの男も死ぬものと思います」

「ふむ」

曹操はそれを聞いて考え込んだ。

「それではそれでいこうか」

「はい」

こうして左慈に山の様な肉と樽に並々と入れられた酒が出された。だが彼はその肉と酒を何なく平らげてしまったのである。

「何と」

それを見た役人達は皆唾然とした。左慈はそんな彼等に対して言った。

「おかわりはありませぬか」

「おかわりと」

「はい。私は何年食べずにいても死にはしませぬが」

「うむ」

「どれだけ食べても平気でもありません。ですからこれ位は何ともないのです」

「むむむ」

それを聞いた曹操はさらに考え込んだ。こうなっては程？も打つ手がなかった。彼等がどうしようかと考えている時にまた報告が入った。

「今度は何じゃ」

「もう一人左慈が姿を現わしました」

「何!？」

曹操はそれを聞いて席から立ち上がった。そして報告に来た者に對して問うた。

「それはまことか」

「はい」

彼は驚愕した曹操の顔を見て自身も驚きながら答えた。

「まことの話でございます」

「うつつむ」

彼はそれを聞いて顎に手を当てて考えながら程？に顔を向けた。

「どう思つか」

「そうですね」

問われた程？も同じ顔をしていた。彼も驚きの表情を浮かべながらそれに答えた。

「まずはその者を捕らえましょう。そしてその者も牢に入れるべきです」

「よし」

曹操はそれを受け入れて彼も捕らえることにした。だがここでまた報告が入った。

「また左慈が姿を現わしました」
「またか」

曹操はそれを聞くともううんざりした顔になった。そして今度は都の門を全て閉め徹底的な搜索を開始した。人相を書いた絵を至る所に貼り城の中にいる全ての者に捜させた。すると何と五百人の左慈が捕まったのであった。

「益々わからぬな」

曹操はその話を聞いてそう呟いた。顔には困惑が現われていた。

「これは一体どういうことだ」

「私にもわかりません」

「私もです」

皆そう答えるしかなかった。曹操の下には天下に名高い知恵者が集まっていたが誰にもわからなかった。

「これが妖術というものでしょうか」

「ううむ」

曹操はそれを聞いてもまだ解せなかった。彼は元々そうしたこと信じない男であったのだ。

「こんな筈がないのだ。これはまやかしだ」

「はあ」

皆彼の言葉に頷くしかなかった。曹操はなおも言葉を続けた。

「まやかしならば破る方法がある。牛や豚の血を用意せよ。たつぷりとな」

「わかりました」

すぐさまそれに従い牛や豚の血が集められた。そして曹操はそれと共に五百人の左慈を処刑場に集めそこを武装した将兵で取り囲ませた。まずは左慈達に牛や豚の血をかけた。

「これで術は使えまい」

不浄なものである畜生の血で以って術を封じるつもりだったのだ。彼は左慈達が血で赤くなつたのを確かめてから兵士達に対して言った。

「斬れ」

「ハッ」

こうして五百人の左慈達は全て首を斬られた。曹操はそれを見て言った。

「これで全ては終わった」

「さあ、それはどうですか」

だがここでまたあの声が出た。曹操はそれを受けて辺りを見回した。顔はもう蒼白となっていた。

「まだ残っておったのか」

「いやいや」

だがその声はそれを否定した。そして今しがた斬られた首のない死体の首の切り口から白い煙が巻き起こった。それは宙で一つの形となった。それは鶴に乗った左慈であった。

「明公、暫くぶりですな」

「貴様、これはどういうことだ」

「ははは、何でもありません。これもまた術でしてな」

「術、そんな筈があるか」

曹操はそれを聞いて即座に否定した。

「それは血で破られた筈だ」

「如何にも不浄のものは仙術には効果があります」

左慈はまずはそれを認めた。

「ですがそれを破ることも可能なのです」

「どういうことだ」

「強い術にはそのようなものは効果がないということです。わかりですか」

「くっ」

曹操はそれを聞いて歯噛みした。そして左慈を見上げた。

「ならば倒すまで。やれっ」

彼は兵士達に弓矢を放たせた。だがそれは左慈には全く当たらない。全て避けられるだけであった。

「おやおや、お怒りのようですね」
「黙れっ」

曹操の怒りはさらに増した。彼はなおも攻撃を続けさせようとする。だが左慈はここで動いた。

「それっ」

杖を一振りさせたのである。すると風が沸き起こった。

それで弓矢を全て落としてしまった。そして今度は今首を切られたばかりの死体が一斉に起き上がった。そして首がそれぞれ宙に浮かんできたのである。

「またか！」

「甦るか、今度は！」

皆それを見て口々に言う。だが左慈達はそれに構わず首を元通りに取り付けると以前と同じように動きはじめた。そして前に出て来た。

「ええい、防げ！」

曹操はそれを見て叫んだ。

「構わぬ、斬れ！」

そして自ら剣を抜いて斬りつけた。曹操は剣も優れていることでは知られている。だがそれでも左慈は生きていた。どの左慈もそれは同じであった。

「ははは、明公、わかっておられるのではないですか」

鶴の上にいる左慈がそれを見下ろして笑った。

「私は剣では死にはしませぬぞ」

「ぬうっ」

曹操は剣を持ったまま彼を見上げて唸った。怒りで顔が紅潮しているがどうにもなるものではなかった。

「貴様、降りて来ぬか」

「それはどの私のことでございましょう」

左慈はそう言って笑った。

「ここに五百人程おりますが」

「まだ言うか」

「言うも何も左慈は私ですが」

「そこで下にいる左慈の一人がこう言った」

「私もです」

「私も」

「私達は全員左慈ですぞ、明公」

「どうなさるのですか」

「ええい、黙れ」

曹操は怒りを爆発させた。そしてそう叫んだ。

「こうなつては勘弁ならぬ。今ここでこの私の手で成敗してくれる」

「私をですか？」

一人の左慈が彼に問うた。

「そうだ」

曹操は答えた。

「私をですか？」

別の左慈がそれに答えた。

「そうだ」

曹操はまた答えた。

「当然私もですな」

「無論」

「私も」

「だから言っておろう」

語気を荒わげて叫んだ。

「貴様等全員成敗してくれようぞ。さあ大人しくせよ」

「ははは、明公も冗談がお好きな方ですな」

「何っ」

そう言った鶴に乗る左慈を見上げた。

「私は死なないというのに」

「まだ言うつもりか。では貴様は何なのだ」

「私ですか？」

左慈

「そうだ」

鶴に乗る左慈に対して問うた。

「貴様は人ではないとでもいうのか」

「人ですぞ、私は」

彼は穏やかに笑ってそう答えた。

「それは間違いありません」

「では何故死なぬのだ。人であるというのに」

「それは私が仙人だからであります」

「それはわかっておると言うたであろう」

「ならもう言うまでもないことですが」

彼は静かにこう言った。

「私は仙人です。だから死なないのですよ」

「クツ」

「明公の知っておられることだけが全てではありません。それをお知らせしたかったのですが」

「私の知らないこと？」

「はい」

左慈はそう言って頷いた。

「明公は確かに優れた方であります」

「うむ」

曹操は自負の強い男であった。自身の力には確固たる自信を持っていた。だからこそ今こうして頷いたのである。

「ですが仙人ではあられません」

「それもわかっておる」

次第に曹操の怒りが収まってきた。彼は穏やかな顔でそれを聞くようになっていた。

「だからこそ問いたいのだ」

「何でしょうか」

「仙人とは人であるな。それには相違ないな」

「はい」

左慈は答えた。

「それでは何故仙人は術を使えるのだ。今までそなたは私に色々を見せてくれたが」

「修業の成果でございませう」

「修業のか」

「ええ。それがなければ今こうしてできはしません。それは何でも同じことです」

「確かに。それでは学問と同じか」

「そういうことになります」

彼はそれにはそう返答した。

「何も難しく考えられることはないのです。明公も修業を積み重ねば私と同じ仙人になれますぞ」

「それは前に申ししたな」

曹操は微笑んでそう言った。

「はい。ですからお誘いしたのですが」

「生憎だが」

その時とはうって変わって落ち着いた声でそう言った。

「どうも私は仙人にはなりたくはない。気持ちは有り難いがな」

「そうでしょうか」

左慈はそれを当然のことであるように受け止めていた。

「明公はこの世に留まられるべき方です」

「そなたもそう思うか」

「はい」

左慈はここにこりと笑った。

「それはもうわかっておりました」

「では何故ここまで私をからかったのだ。冗談にしても程があるぞ」

「ははは」

左慈は笑った。

「ほんのたわむれでございませう。今まで色々と回りましたが」

「江南や荊州にも行っていたようだな」

「はい。そこも巡り明公と御会い致しました。いやはや、面白かったですぞ」

「許都がか、それとも私がか」

「明公がでございます。貴方は詩がお好きですな」

「うむ」

曹操は頷いた。

「それではお願いがあります。私のことを詠んで頂きたいのです」

「まさかと思うが」

左慈はそれを聞いて問うた。

「それを私に頼みにここまで来たのかな」

「左様」

左慈は頷いた。

「宜しければ明公のご息子にも詠んで頂きたいのですが」

「贅沢な奴だ。そなたは贅沢とは無縁ではないのか」

「詩は別ですから」

「わかった。それでは詠もう。これ」

彼はここで側にいる者に声をかけた。

「筆と木簡を。あと丕と植を呼んで参れ」

「わかりました」

それを受けて筆と木簡が持つて来られた。そして曹操の二人の息子達も呼ばれた。彼等も父と同じく文才に恵まれていた。とりわけ曹植は当代きつての詩の天才と謳われているのである。

「それでははじめろぞ」

曹操は左慈に対して問うた。

「どうぞ」

左慈はそう答えた。そして三人は詩を朗し、それを書きはじめた。それを聞く鶴の上の左慈もその下にいる五百人の左慈もそれを聞いて恍惚とした顔になった。

左慈
詩が終わった。そして曹操はそれを一人の左慈に手渡させた。二人の息子のものでもある。そして鶴に乗る彼に問うた。

「これでどうだ」

「有り難うございます」

彼は笑顔でそれに答えた。満足しているようであった。

「これでよいな」

「はい。心おきなく仙界へ行くことができます。それでは」

「うむ」

左慈はこうして天高く旅立った。そして地上にいた五百人の左慈も姿を消した。後には曹操だけが残った。

「贅沢なやつだ。私の詩を持って行くとはな」

「左様ですな」

そこにいた共の者の一人がそう言った。

「明公の詩を持って行くとは。欲の張った男です」

「ですが明公」

別の供の者がここで曹操に対して言った。

「何だ」

「何の詩を送られたのでしょうか。ご子息方も」

「それは言えぬな」

彼は笑ってそう答えた。

「知っておるのはあの男だけだ。もう行ってしまったがな」

「そうですね」

「今頃あの男は」

曹操は言った。

「仙界に着いておる頃かな。私の詩と共に」

空を見上げてそう言った。そこには晴れ渡った青い空が広がっていた。

この詩がどういったものだったのかは曹操と左慈の他は誰も知らない。だが仙界では今も左慈がその詩を詠んで日々楽しんでいるという。これこそ最高の贅沢であるとある仙人が言った。

左慈

左慈

完

2
0
5
·
4
·
6

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182a/>

左慈

2008年11月7日08時00分発行